

第1回築川ダム周辺自然環境検討専門委員会検討議事録（要旨）

日 時：平成13年12月27日

13時30分～16時30分

場 所：岩手県自治会館

<参加委員>

- （日本野鳥の会会員）荒木田委員
- （岩手大学名誉教授）小野委員
- （岩手県環境生活部自然保護課長）菅野委員（当日は代理の千葉氏が参加）
- （岩手大学名誉教授）菅原委員
- （岩手大学助教授）竹原委員委員
- （岩手イヌワシ研究会長）田村委員
- （盛岡市環境部長）角掛委員
- （岩手県自然保護協会事務局長）中村委員
- （岩手県立大学教授）由井委員
- （岩手大学教授）吉田委員

<事務局；県の出席職員>

竹内県土整備部長

吉田県土整備部次長

河川課、佐藤河川開発監

盛岡地方振興局築川ダム建設事務所

菊池所長

柏 次長

石川技術副主幹兼工務第一係長

<事務局；業務委託先>

パシフィックコンサルタンツ株式会社

望月（第三技術部長）

伊藤（環境グループ課長）

<委員会規約承認、委員長選出、資料の公開、非公開について>

委員会の設立趣意と規約（案）につきましては原案どおりとする。

委員長は、小野委員とする。

配布用の資料について事務局案で了承。

公表用の資料について事務局案で了承。なお、1月10日までに各委員からの新たな指摘はなし。

<資料1：現在までの自然環境調査結果について>

委員の任期、工事の工程について説明を行うこと。

次回の委員会まで整理して提出する。（事務局回答）

新たに委員になったため過去の経緯で不明な点があるのだが、昆虫類の確認種リスト、調査の方法等について説明を受けたい。

→調査手法の概要を説明。（事務局回答）リスト等については、後日、送付又は説明を行う。

<資料2：動植物の保全措置について>

<動物>

クマタカ以外に具体的な保全措置の記載が無いが、補足調査のみ行うということか。

補足調査を行い、15年度には評価を行いたい。（事務局回答）

これまでの調査で、全ての生物相を把握したというスタンスではなく、調べ残したものがあるというスタンスで調査を行う必要がある。このため蝶類調査で任意調査を行うとあるが、トラップ調査を含めて行った方が良いのでは。

調査の前に委員の先生と相談して調査を進めたい。（事務局回答）

保全措置に関する方針が書かれているが、調査方針に関して最初に書いて頂きたい。また、調査方針として、環境影響評価に関することにも触れる必要があるのでは。これまでの調査は既往調査として、今後新たなスタンスに基づいて調査を行うべきである。

築川ダムでは、過去にも多くの委員会があり、そこで検討しながらベストを尽くすという方法で調査を実施してきている。また、そのデータが上がってきたものについて検討を加えて、それを積み重ねてきているこれまでの実績がある。その上に今回は新たに県版のレッドデータブックが出たとか、そういう時系列的な問題があるため補完調査を行うという位置づけであると理解している。これまでの実績が現在あって、それでこのような工事計画等々が組み立てられてきている。

（小野委員長経緯説明）

新しい委員の方々にそれらのデータをごらんいただけるように手配すること。

（小野委員長より事務局に指示）

<植物>

移植を含めた保全措置を岩手レッドデータ B ランク以上としているが、C ランクについても生息基盤が脆弱という設定理由がある。ここで、B ランク以上を保全対象とした理由、議論が抜けていると思われるがどうか。また、レッドデータ等の基準をどのように扱うか分かっているならば教えて頂きたい。

一応 A B C D という分類は行っているが、各ランクをどう扱うかというようなものはまだ県レベルでやられていない。それは今後の課題だと思う。国レベルで見られる機会が少ないと言っても岩手県では多く見られたりする。このため取り扱いを一定にすることはできない難しい問題である。このため、今のところは、

重要種の取り扱いについてはその都度都度考えていかなければならない。1回で全部決めると言われても、なかなか難しい。(菅原委員説明)

群落レベルの希少性、注目性というものの検討をしていただきたい。なければないという結論でも出していただきたい。

群落については、現在、ダム計画の段階でトンネル構造を多く採用し、土工部を橋梁部に変更し、土捨て場の数を減らし、原石山の中止の検討を行い群落関係の保全を図る考えである。また、サーチャージ水位から常時満水位間についてもほかのダムの例も見ながら群落として極力大きく残していく計画である。(事務局回答)

植生関係の資料を出して頂きたい。

群落の調査も行っている。(植生図表示)(事務局回答)

ダム周辺には、非常に立派なケヤキ林があるため、これをどのように保全していくかということが問題になる。これがうまく保全されると、立派なダムになると以前から提言しているが今回は検討に入っていないようである。この点はこれからであり、群落についてもいかに対処するかということは問題である。(菅原委員コメント)

1種ずつ扱うことも大事であるが、なぜ生物がそこにいるのかということも非常に大切なことなことである。ただ移植すればいいという考えは、もうそろそろやめるべきである。岩手県のレッドデータブックができたことによって、どのように植物や動物が扱われていくか注目している。築川ダムもこれからできるダムであるため、他のダムを参考にではなく、また別な新しい考え方が必要である。その他、御所ダムが20年たっておりいろいろな結果が出ている。その辺を少し参考にして、最善の方法でやっていただきたい。

築川ダムは、これからのダムであるので、委員の方々からいろいろご指導いただきながらやっていきたい。(事務局回答)

補足調査の調査範囲を見ると、改変される箇所のみを対象に計画しているが、各動植物の生息地を考えるとということで、生態系の観点から調査範囲をもう少し広げた形で設定すべきではないか。

今までの環境調査のすべての資料が、新しく委員になられた方々にご説明できていなかったという反省をしている。付替道関係、貯水池の周辺、湛水区域内す

べてやっているこれまでの環境調査のデータ、結果を次回の委員会までに送るなり、説明するなり対応していく。（事務局回答）

<資料3：希少猛禽類モニタリング調査結果及び今後の調査方針等について>

内沢クマタカの営巣に配慮して、営巣木周辺の伐採にストップをかけたということは大変適切な対応であった。

クマタカの繁殖を行わないことというのは、どういう結果に基づいて判断して、その結果を一般に対してどのように発表するのか。

毎月調査に行って、モニタリング調査に行って、その状況で判断していく。

（事務局回答）

モニタリング調査が月に1回、2、3日だから、どれだけ正確に押さえられるか心配あるが、繁殖をしていた場所がわかっていて、前回までそこにいた雛がもういないということが確認できれば失敗と判断できる。ただ、もう一回本当に繁殖していないかどうかは慎重に巣に接近して確認しないとだめである。もし、確認できれば、工事のペースを上げて良いと考える。（由井委員意見）

確認の方法については、いろいろ相談しながらやっていきたい。（事務局回答）

繁殖が失敗したら失敗したという判断のできる観察をしてほしい。クマタカの場合には、一般的に複数の巣を持っており、交互に繁殖する場合がある。このため、わかっている巣が失敗しているかといって、その周辺の繁殖調査をしないで工事のサインをするのもまた危険である。そういうものをすべて確認すれば、早期に工事を再開しても良いと考える。（田村委員意見）

工事箇所が猛禽類の巣から500メートルというのは近すぎる。どこの場合であっても近すぎる。どういう必要工事の場合であっても近すぎる。

付替道路より近いところを県道が実際走っている。今度つくる道路はそれより遠い位置になる。（事務局回答）

クマタカは厳密に言えば、繁殖した場合はヒナが1年間巣の周りにずっといる。厳密に言えば繁殖期というのはなく、ほぼ1年間繁殖期という考え方の方が妥当である。

いずれ営巣中心域を基本的に工事を避けるというのは最もとるべき、関係者のマニュアルにも書いてある戦略である。また、既存の県道が通っていて舗装と

が改良工事さらにもっと近いところで農作業を行っている事実もある。そちらがよくて、何で新しい工事がだめなのかという理屈が逆に立たない。（由井委員意見）

工事ごとに騒音を測定し、繁殖成否との関係を整理すれば良いのでは。具体的に配慮するといっても、その騒音がどれぐらいのレベルのものかわからないし、きちんと納得させるためには測定する必要があるのではないか。

事務局としても、そういう調査項目があれば対応していくべきだと考えている。騒音が幾らになれば影響があるとか、これはやっていくべきだとなれば私たちも考えていかなければならないと思っている。そこで、そのような指標はあるのか教えてほしい。（事務局質問）

低騒音型とか一般的な対策はここにやるように書いてあるが、騒音と振動等を測定しても、どこからがよくて、どこからが悪いというデータはない。このため、低騒音とか低振動を使用する、500メートル以内に入る工事は営巣過敏期を避けるとか、そういう対策でやっている。これまでの経験では、もっと近いところでやっている工事においても成功している例がたくさんある。實際上、これ以上トンネルの位置がずらせないとすれば、営巣期、巣の位置に応じた営巣過敏期を避けるという対策でやらざるを得ないと思う。また、通常クマタカの幼鳥というのは森林からはほとんど出ないため、対岸のトンネル工事の方まで飛んで来るようになれば、それはむしろ飛翔力がついていると判断できる。あくまでも営巣中心域を主体に対策を考えれば良いと思う。（由井委員意見）

環境省が出したマニュアルは、あくまでイヌワシのサイクルに合わせてクマタカについて書いているものであり、クマタカの巣立ち、幼鳥の解析を行って営巣というのを書いたものではない。今後、正確な調査結果に基づいてそういう評価を行えば、変わった図になると思われる。保全については、営巣中心域の考え方でここは対処するのが良いと思う。（田村委員意見）

これまで積み重ねてきた調査結果を整理し、検討しながら、今後さらに調査していきたい。（事務局回答）

内沢クマタカについても営巣地が寄ってくる可能性があるので、配慮は引き続きすべきである。

< 4 : その他 >

平成 11 年ぐらいに岩手県の自然環境保全指針が出ており 1 キロメッシュデータに基づいて配慮事項というのがある。この自然環境保全指針図の取り扱いを次回まで検討して欲しい。そこで論議したい。

築川ダム工事周辺の鳥獣保護の指定状況は。ダム事務所から自然保護課の方に保護区域を広げるとか設定してほしいという要望を出してもらえると良い。

来年度まで休猟区の箇所があるが、クマタカのところは外れる。(事務局回答)

法面等の緑化について、貴重種の問題ではなく、既に全国的には移入種の問題が始まっており、遺伝子汚染等が行われている部分が様々ある。自然環境とは違いますが緑化に関しての検討等もやはりこの委員会で提言できるようにして頂きたい。

法面緑化については、今、試験的に在来種について付近から採取した種を生育できないかということを試験的に行っている。できるだけ成功させたいと考えている。(事務局回答)

クマタカの巣の対岸に林道が載っているが、この林道の扱いについて指摘しておきたい。例えば今議論していることが全然意味がなかったということにならないように、その辺の検討の必要性等について指摘をしておきたい。

林道については、地主さんたちと要望もあることから、今話し合っている状況である。(事務局回答)

日向ダムにおける湛水後のケヤキ状況調査の結果はあるのか。後日話をするのか。資料等は用意し、後日報告する。簡単な結果について報告すると、常時満水位からサーチャージ水位間に入った植物で、アカマツ、それからスギ、ヒノキについては、20 日程度の湛水ではほとんど問題がなく生育しているのが確認されている。ケヤキについても一部枯れた樹木が見られたが、大部分はそのまま生育している状況を確認している。(事務局回答)